

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 諫早 庸一

本論文は、13世紀にペルシア語で記された『イル・ハン天文便覧』に含まれる「キタイ暦」と呼ばれる中国に起源を持つ暦を取り上げ、その誕生の背景、経緯や特徴を論じる前半の研究篇5章と、この暦の資料解題、校訂、翻訳、注釈をまとめた後半の校訂訳注篇4章の合計9章からなる。本文の前に、凡例と先行研究の紹介、本論文の目的について記された序部、後に、研究篇の内容を要約し、本論文の意義を語る結論が置かれている。また、附録として、漢語術語のペルシア語転写一覧と本文で翻訳引用された史料の原文（ペルシア語、アラビア語、フランス語、漢語）が付されている。まず本論文の内容を簡潔に紹介する。

第1章は、キタイ暦を生み出した人と時代背景についての概説である。『イル・ハン天文便覧』の著者ナスィール・アッディーン・トゥースィーの生涯、彼が主導しイル・ハン朝によって建設されたマラーガ天文台とその運営財源が紹介され、トゥースィーが著し、その死後不断に改訂が行われた『イル・ハン天文便覧』とその改訂者たちについて解説がなされる。

第2章では、ナスィール・アッディーン・トゥースィーが天文学研究において達成した成果と新知識普及に向けた彼の努力が紹介される。まず、プトレマイオス体系とアリストテレス自然学の不調和を克服するためにトゥースィーが編み出した「トゥースィーの対円」についての解説があり、次いで、数学と天文学の基本文献であるエウクレイデス『原論』とプトレマイオス『アルマゲスト』の2つの著作をつなぐテクニク群である「中間諸学」をトゥースィーが再述（校訂と解説）したことが論じられ、その具体例として『デドメナ』の場合が説明される。

第3章では、トゥースィーと「対話」を行ったキタイの賢人フー・ムン・チーの来歴とキタイ暦の内容が検討される。まず、賢人がフレグの西方遠征に加わった道士であったこと、キタイ暦の二大典拠が金末元初の官暦であった重修大明暦と唐代に起源のある符天暦であることが確認される。次いで、この暦がペルシア語史書でしばしば「ウイグルの暦」と記された理由が検討される。従来、この暦は東トルキスタンのウイグル集団と関係があり、彼らを経由してイラン高原にもたらされたためにこう呼ばれると考えられていたが、それは誤りであり、イル・ハン朝宮廷に仕えこの暦を運用していた仏教徒バフシーがウイグルと呼ばれた文字・言語を使用していたことが、その呼称の理由であることが明らかにされる。

第4章は、キタイ暦の典拠の一つである符天暦についての検討である。中華王朝や日本では、符天暦がヘレニズム起源のホロスコープ占星術において天体の位置を計算するために用いられていたことが論じられる。また、この暦が具体的にどのように使われたのかを唯一伝える敦煌文書の分析から、キリスト教東シリア教会、仏教、道教など多様な要素が入り混

じったこの暦自体が、すでにユーラシア規模の文化交流の産物であることが論じられる。

第5章では、モンゴル帝国東方と西方における時の意味や伝統、政権の時に対する態度の相違が指摘され、この違いのゆえに、フー・ムン・チーが伝えたはずの情報の一部のみがキタイ暦として『イル・ハン天文便覧』に組み入れられたことが論じられる。また、符天暦に含まれる東方ホロスコープ占星術の方法が、「トゥースィーの革新」を経た西方では、すでに時代遅れとなっていたことが説明される。

校訂訳注篇の第6章では、著者が校訂訳注に用いた『イル・ハン天文便覧』の9つの写本が類型化され紹介される。第7章は、キタイ暦の日本語訳、第8章はその注釈（解説）、第9章はそのペルシア語校訂版である。底本としては、トゥースィー死後3年後の1277/78年に書写され、現存する写本の中では最も古いロンドン写本が用いられている。

この論文の学界への最大の貢献は、キタイ暦のペルシア語テキストを9点の写本に基づいて厳密に校訂した上で日本語に翻訳し、注釈をつけた校訂訳注篇である。読みにくい漢語発音のアラビア文字への転写が多く含まれ、前近代天文学分野で用いられた語彙と高度な科学的知識を必要とする難解なテキストに取り組んで、一連の文献学的な作業をなし遂げた著者の努力は高く評価できる。校訂訳注篇は、今後当該分野の研究を進めるうえで長く参照されるべき基礎的な資料となるだろう。

また、研究篇では、入手困難なものも含め、多言語で記された数多くの資料を駆使して、キタイ暦を軸とするユーラシア大陸東西の文化交流の一側面を、具体的に浮かび上がらせることに成功している。従来、中国史やイラン史、科学史などの各部分で論じられ、必ずしも十分に比較検討されて来なかった史実をつなぎ合わせ、一つのまとまった論考に仕上げた著者の手腕には見るべきものがある。個々の論点については先行研究に負うところも多いが、随所で新しい知見も加えられており、このような形にまとめることには十分な意義が認められる。

審査委員からは、論述というよりは解説的な部分が多く含まれている、暦、暦法、こよみ、カレンダーという用語の使い分けと翻訳が必ずしも一貫していない、天文学に関わるアラビア語テキストの内容について理解が不足している、読みが不正確であるといった特に研究篇の内容に関わる批判がいくつか出された。また、著者がいうように、トゥースィーとフー・ムン・チーの「対話」によって成立したのが校訂訳注篇の「オリジナル版」だとすると、それ以後の種々の注釈や追加はどのような場で生じたのかという写本の分類や系統に関わる疑問も出された。さらに、凡例や文章、図や表の不備についてもいくつかの指摘があった。

このような問題点や不備はあるものの、本論文が全体として『イル・ハン天文便覧』に含まれるキタイ暦の内容とその西方ユーラシアへの伝来について多くの新知見をもたらし、モンゴル時代のユーラシア文化交流研究に大きな刺激を与えることは間違いない。従って、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。